

## 西国第四番 横尾山

御本尊／十一面千手千眼観世音菩薩 開基／行満上人

## 天台宗 施福寺

## 利他と共生

津守佐理

二十一世紀になって、コロナ禍が起こってから、「利他」という言葉が国の内外によく聞かれる様になりました。これは伝教大師さまが、「山家学生式」の中で、「悪事を己に向かえ、幸事を他に與え、己を忘れて他を利するは、慈悲の極みなり。」と仰ることに相通じるもので、「忘己利他」の標語を皆様もよくご存じでしょう。

「二十一世紀の知の巨人」と言われるアメリカの、イン・ブレマー、それにフランスのジャック・アタリと言った人たちが経済概念の中で「利他」をとえています。生物学者の福岡伸一氏もまた、「生物は利他的共生で進化する。」「細胞は利他的共生、死は利他的行為」などと述べられています。「己を忘れて他を利するは

慈悲の極みなり」この言葉は観音様の我々に対するおはたらきそのものであります。それならば「利他」とはどういうことか。ある僧は、「他者の利のために行動することであり、分かち合うこと。自分以外の存在に目を向け、苦しみや悲しみに共感し、ともに歩むことが利他の行為です。」と説かれております。

十一面千手千眼観世音菩薩の『十一面』は、自分以外の存在に目を向けて人々の苦しみや悲しみに共感することを意味し、観音様の「大悲」を表します。納経帳の御朱印には「大悲殿」とお書きします。これは、参拝された方が「観音様をしっかりと拝みました。観音様にしっかりと見て頂きました。」という証明書でもあります。また、人々に手を差し伸べて大慈を授けられるのが千手千眼観音の「御手」であります。千の手では

まだ足りないのです。眷属の二十八部衆がひかえておられます。利他という行為そのものが観音様の慈悲ということなのです。

共生は、衆生として生きとし生けるすべてのものが利他行として共に生き、互いに生かされ生かす世界が法界、すなわち仏界であり、『死は利他的行為』とは仏教で言う「生死一如」に他なりません。

合掌

